

初期スキル が 便利すぎる! 異世界生活 が 楽しすぎる!

Shoki Skill Ga Benri
Sugite Isekai Seikatsu Ga
Tanoshisugiru!

10

霜月電花

Hyouka Shimotsuki

Illustration
パルプピロシ

アスラ

ラルクの冒険者
パーティの一人。
魔法の才に秀でた
王子様。

レティシア

ラルクの冒険者
パーティの一人。
剣を扱う前衛職。

グルド

ラルクの義父。
顔は怖いが
とっても優しい。
実は歴戦の英雄。

ローネリア

ラルクの妻その1。
天真爛漫な
王女様。

リン

ラルクの妻その2。
元気いっぱいの
冒険者。

登場人物紹介

MAIN CHARACTERS

ラルク

本作の主人公。三つの便利な
初期スキルを駆使して、
異世界での第二の人生を
思う存分楽しむ。

1 弟子には負けない

俺、四宮楽は、元々は日本人の高校生だった。不幸にも交通事故で命を落としてしまったが、どうやらその死は手違いだつたらしい。そうして神様であるサマデイさんから、お詫びとして三つの便利な初期スキルをもらつて、異世界に転生してきた。

転生後、グルドさんに引き取られた俺は、彼と義理の親子となつた。そうして俺は、義父となつたグルドさんから、様々なことを教えてもらいつつ、異世界を堪能するのだった。

レティシアさんのしたいこと——つまり鍛錬がしたいということで、楽園内にある“B一ランク”の迷宮に挑むことにした。本来であればもう少し強めの所に行くのがよいのだが、レベル上げというよりもまずは技術を磨く

くのが先だと話し合つてこの場所になつた。

「ルーカスとレティシアさんが前衛で、後衛はアスラに任せる。俺はリンの代わりにサポートをしようと思つてる。この陣形で大丈夫?」

「僕はいいよ」

「私も」

「いいですよー」

俺とパーティーを組んでいる、アスラ、レティシアさん、そしてスケルトンのルーカスの返答を聞いた俺は「それじゃ行こうか」と言つて、迷宮の中へ入つていつた。

B一ランクの迷宮、最初の敵はゴブリンの集団だつた。

これだつたら、レティシアさんの剣の練習相手にちょうどいいだろう。

俺とアスラは周りの警戒をして、ルーカスにはレティシアさんのサポートに回つてもらつ。

「ハアッ！」

レティシアさんは自分に任されたと知ると、やる気十分に魔物達に向かつて突つ込んでいつた。

魔物としてランクが低いゴブリンだが、数は多い。

さらに、B一ランクの迷宮の魔物なだけあり、その強さは普通のゴブリンと比べて数倍はある。

「ツ！」

ゴブリン達は連携はあまりしないが、やはり数が多い。レティシアさんもその数に手こずつていた。

ルーカスはサポートを上手くこなしており、そんな支援を受けて、レティシアさんも徐々に調子を上げていつた。

それから五分ほど戦闘が続き、ゴブリン達を全滅させた。

「今日、調子いいかも！」

「ですね。姐さんの動きがいつもよりキレイがよかつたつす」

「鍛錬の成果ですね」

レティシアさんは、嬉しそうに飛び跳ねた。

そうして話していると次の魔物が出てきたので、今度は後衛のアスラに対処させる。

アスラも調子がいいみたいだ。

今日はよい感じに進みそうだな。

『雷炎』！

アスラは、以前俺が教えた火と雷の合成魔法を完璧にマスターしていた。
あれ? 今の『雷炎』、俺のよりも速くなかったか?

「なんだか今日は魔法のキレがすごくいいよ。データ様に魔力循環を強制解放された前よりも、よい感じ」

「……もしかして、魔力が体に馴染んできたんじゃないのか？あれから結構時間も経つてるし」

「そうかもしれないね。今回の迷宮探索で勘を取り戻せたらしいな～」

そう言っているアスラだが、俺から見たらすでに十分、勘を取り戻している。

俺ものんびりしていたら、ステータス面では勝っていても、技術面でアスラに負けてしまうな……

これでも一応、師匠という立場であるんだが。

「ルーカスちょっとよいか？」

「どうしたつすか？」

アスラの成長速度に焦りを感じた俺は、レティシアさんとの連携で楽しそうに魔物を狩っていた、スケルトンのルーカスを呼んだ。

「ちょっとの間、レティシアさんとアスラを頼めるか？弟子の成長ぶりに焦りを感じてさ」「あ～……確かにアスラ殿の成長ぶりは焦りますね～……」

その後、俺は「一人で潜つてくる」と言つて、皆と離れた。

皆と離れて一時間ほど経った頃、俺はこの迷宮の最下層に当たる場所で、魔法の特訓を行つていた。

「ツ！」

「グギヤツ!!」

その内容は、目を閉じた状態で、半径一メートルに入つてきたすべてのものに反応して魔法を放つ、という極めて危険な鍛錬方法。

前もこれに似た鍛錬を行つていたが、その時は半径十メートルほどの余裕のある距離だつた。あの時は失敗しても第二第三の攻撃ができるが、今のこれだと一発でも外せば命が危ない。「チツ、また微妙に狙いが外れた……瞬時に判断するのが難しいな……」

魔物の死体を確認した俺は、顔に当てたはずの魔法が首に当たつているのを見て呟いた。

瞬時に相手の位置を計算して魔法を放つこの鍛錬法なら、魔法の技術力を飛躍的に上げられる。技術が上がれば、まだ完璧に使いこなせていないレベルの魔法も扱えるようになるだろう。

「はあ……アスラの成長ぶりが羨ましい……」

まあ、俺は神様からスキルをもらい強化されているだけ。

その一方で、アスラは天赋の才能の持ち主。魔法のセンスが違すぎるんだよな……

「……つと、落ち込んでいる暇はないな！ こっちだつて、技術を磨けば、師匠先生もまだまだできる！」

そう意気込んだ俺は、スキルの『マッピング』を使い、魔物がいる場所に向かつた。結局、その日は一日、一人で行動した。

その後、アスラ達と事前に打ち合わせていた階層で合流した。

「ラルク君、どうだつた？」

「ああ、一人で魔物をたくさん狩りまくつた。レベルも上がつたし、新たな魔法も考えてきたよ。アスラに負けるかって思いで、たくさん魔物を狩つてきたからな」

「そこは、一度くらい僕に勝たせてくればよいと思うんだけど……まあ、先を行くラルク君を追いかけるのは楽しいから、そつちの方が僕は燃えるけどね」

アスラはやる気に満ち溢れた顔でそう言つた。

それから俺は、『明日の迷宮探索時に、今日一日で強化された俺の魔法をみんなに見せる』という約束をしたのだった。



翌日は皆と離れず、一緒に迷宮を探索することにした。

さつそく、昨日約束した通り、新しい魔法を見せることになつた。

「おつ、ちょうどオーラークの群れがいるな、あそこに行つて新しい魔法をかけるから、レティシアさん達はここで見てて」

「大丈夫？ 十体以上いるよ？」

「大丈夫大丈夫。新しく開発した魔法、俺が集中力を欠かなければ最強だから」

俺はそう言って空中に飛び、オーラーク達の目の前へと降り立つた。

昨日開発した新しい魔法——それは昨日の鍛錬法を用いたもので、名付けるとすれば、『オートターゲット』だ。

「『グルオツ!!』」

俺に気がついたオーラーク達は、俺に向かつて叫びながら向かつってきた。

そんなオーラーク達に、俺は焦らずに意識を集中する。

そして、半径五メートル以内に入つた敵から、頭部を狙つて魔法弾を当てていつた。

一分もしないうちにオーラークの群れを倒した俺は、皆の所に戻つた。

「す、すごいよ、ラルク君！ 敵を感じた瞬間、即、魔法が向かっていった！ あの魔法、敵に囲まれた時どかに使えば相当強いよね！」

「ああ、そんな時に使う用の魔法だ。派手な魔法だと魔力消費はすごいし、戦場をでこぼこにしてしまう可能性があるからな。これなら確実に目標だけをピンポイントに破壊できる。味方にはいつかい迷惑をかけない魔法だ」

俺がそう説明する間、アスラはずつと興奮していた。

まあ、この地味な魔法のすごさは同じ魔法使いじゃないと分からないので、レティシアさんとルーカスはポカんとしていた。

「そういえば、昨日一日、ラルク君一人で迷宮探索してた時、レベルって上がった？」

興奮したアスラがそう聞いてきた。レティシアさんも興味があるみたいで「上がったの？」と聞いてくる。

俺は『念写』で、能力値だけ紙に写してみんなに見せる。

みんながそれを見ている間、俺は俺で、自分のステータスを確認する。

【名前】ラルク・ヴォルトリス
【年齢】15

【種族】ヒューマン

【性別】男

【状態】健康

【レベル】197

【SP】1960

【力】17796

【魔力】21445

【敏捷】18839

【器用】15772

【運】51

【スキル】
『スキル』
『調理』5『便利ボックス』3『生活魔法』4『鑑定』5『裁縫』3

『集中』5『信心』5『魔力制御』5『無詠唱』5『合成魔法』5

『気配察知』5『身体能力強化』5『体術』5『剣術』5『短剣術』3

『毒耐性』3『精神耐性』4『飢餓耐性』1『火属性魔法』5

『風属性魔法』5『水属性魔法』5『土属性魔法』4『光属性魔法』5

『闇属性魔法』4『雷属性魔法』5『氷属性魔法』4『聖属性魔法』4

『属性魔法』4『属性魔法』5『属性魔法』4『属性魔法』4

『無属性魔法』・5』『鍊金』・4』『マッピング』・5』『念写』・2』

【特殊 能力】

『記憶能力向上』『世界言語』『経験値補正』・10倍』『神のベール』

『神技・神秘の聖光』『悪・神徒魔魔法』『神技・神の楽園』

【 加護 】

『サマティエラの加護』『マジルトの加護』『ゴルドラの加護』

【 称号 】

『転生者』『神を宿し者』『加護を受けし者』『信者』『限界値に到達した者』

『神者』『教師』『最高の料理人』『炎魔法の使い手』『雷魔法の使い手』『剣士』

『戦士』『鑑定士』『風魔法の使い手』『光魔法の使い手』『格闘家』

『水の魔法の使い手』『無の魔法の使い手』

だいぶ、属性魔法の方もレベルMAXになつてきただな。残りは、土、闇、氷、聖と、あまり使わない属性ばかりだ。

「レベル197つて……僕達と離れすぎてるよ……」

「ラルク君のレベル、私達と比べ物にならないよね……」

「主のレベルの上がる速度、おかしいっすよ……」

俺のステータスを確認したみんなはそれぞれ意見を言つて、若干落ち込んでいる様子だった。

レティシアさんがバンツと自分の頬を叩く。

「ラルク君との差に今さら驚いていても仕方ないよ！ 私達がラルク君に追いつくには、ラルク君以上に頑張ればいいんだよ！」

レティシアさんがそう言うと、アスラとルーカスは「そうだ」と言つて、やる気に満ちた顔をした。

その後の迷宮探索では、レティシアさん、ルーカス、アスラの三人は気持ちが高ぶっているのか、前日よりもよい動きをしていた。



迷宮にやつてきて数日が経つた。

何度か家に帰り、ともに俺の妻である、リアことローゼリアとリンに、迷宮であつたことを話したりした。

休日と鍛錬の日を作り、俺達パーティーは着実に成長していく。俺は加護や特別なスキルでレベルアップ速度が加速されているが、アスラ達はそんな俺を羨ましがる時間さえ惜しそうに、鍛錬を頑張つていた。

「よし、今日はここまでにしよう。連日の鍛錬でだいぶ体力を消耗してるので、明日は休みだ」

「はいっす……」

「はーい」

「もうちょっとしたかったけど、ラルク君がそう言うなら仕方ないね」

俺の指示に、ルーカス、レティシアさん、アスラの順で返事をする。

そして、アスラの転移魔法で迷宮から家に帰宅した。

俺は身を綺麗にするために風呂に入つて、リア、リンの所に向かつた。

「ただいま、リア、リン」

「おかえり～、ラルク君」

「おかえりなさい、ラルク君」

リンとリアは、部屋に入つてきた俺にそう声をかけて、読んでいた本を閉じた。

最近の二人だが、王子のウォリスから借りてきた本を毎日読んでいるみたいだ。一度俺も読んだ

が、王道の冒険物語だった。

「ねえ、ラルク君。明日、鍛錬お休みの日だよね？」

一緒に本を読んでいると、リアが明日の予定を聞いてきた。

「ああ、休みだよ。何かしたいのか？」

「うん、ほら、最近ずっと楽園の中にいるでしょ？ 久しぶりに王都でプラプラ散歩したいな～って思っちゃつて」

「あ～、そういうばは最近はずっと楽園の中にいたな……リンも行きたいのか？」

「うん、ラルク君がよいなら三人でデートしようつて、リアちゃんと話してたんだ」

「なるほどな……まあ、これと言つて予定もないし、久しぶりにデートするか」

そう言うと、二人はパツッと笑顔になつて喜んだ。

その日の夕食時に、明日現世に出ることをレティシアさんとアスラに言うと、二人ともそれぞれ一度、家族に顔見せに行きたないと言つた。

なので明日は、リン、リア、俺、レティシアさん、アスラで現世に出ることになつた。



そして翌日、扉を開いて現世の王都にある義父さんの家のリビングに出た俺達は、それぞれ別行動することになつた。

アスラは転移魔法で家に帰り、レティシアさんは実家に向かつた。

残った俺、リン、リアは商業区の方へ向かう。

「なんだか少し帰つてないだけで、懐かしいって感じるね」

「そうだな、そんなに時間は経つてないけど、懐かしいって感じるな……」

久しぶりの現世に、懐かしさを感じる俺達。

以前世話になつた人達に会つたりして、現世に出てきてよかつたと感じる。

朝からずつと歩き回つていた俺達は、久しぶりに店の調子も見たくて、俺が経営に携わっている店、通称一号店へとやつてきた。

「ここも相変わらず人気だね。さすが王都一人気のお店つて紹介されてるだけあるね」

リンの言葉通り、一号店の中にはたくさん的人が入つていた。

お昼時ということもあり、外まで人が並んでいる。

さすがにこの列を並ぶのはな……せつかくのデートだし……

そう思つた俺は、商業者特権ということで、裏から入つて二階に通してもらうことにした。

二階に行くと、俺達の対応をするために、この店を任せているナラバさんが來た。

「ラックさん、お久しぶりですね」

「久しぶりです、ナラバさん。外、すごい行列でしたね」

「少し前から他国の方も食べに来るようになりまして、忙しさが倍になりました。ですが、楽しき

もありますので苦ではありません」

ナラバさんはすごくいい笑顔で言つた。

……まあ、でも顔に相当の疲労が出ているな。

これは今すぐにでも人手を増やす手配をした方がいいだろう。

ほつたらかしてよいのだろうかと、前から心配していたのだ。やはり見に来ていないと、こういつた事態を見過ごしてしまう。

食後、店を出た俺は二人に聞く。

「デート中だけど、ラックさんの所に寄つていいかな？」

「お店のために人員補充したいんだよね？　いいよ、ナラバさん達が倒れたら、ラック君が悲しいもんね」

「私もいいよ」

「ありがとう、リア、リン……」

そんな優しい二人にお礼を言つて、俺は、ラックさんの商会である、ドルスリー商会に向かつた。

ドルスリー商会に入った俺は、受付でラックさんがいるか確認を取つた。

すると、今日はすべての予定が終わつたので、部屋にいると教えてもらつた。

「ちょっと行つてくる。すぐに戻つてくるよ」

「いつてらつしやい」

「待つてるね」

リア、リンには待合室で待つててもらひ、一人で階段を上がつていつた。

そして、ラックさんがいる部屋の前に着いた俺はノックをして、返事が来たのを確認して中に入る。

「ラルク君、久しぶりだね。どうしたんだい？」

「すみません、急に来てしまつて。実は一号店について話があつて来たんです」

俺がそう言うと、ラックさんは持つていた資料を机に置き、話を聞いてくれた。

俺は单刀直入に、「ナラバさんが過勞で倒れるかもしねない」と伝えた。

「なるほど、確かに最近は他国からもわざわざ王都まで来て、本場の味を楽しむ料理好きの方が増えていると商会の者達が話していたね……」

「はい。他国から来る人が増え、ナラバさん達が休む暇もなく働いていたんですね。楽園にずっといて気づくのに遅れてしまつて。それで、今日急に来たという感じです」

「そつか、分かつたよ。数日以内に人の手配をするね。ラルク君は忙しいと思うから、ナラバ君に面接してもらつたらしいよね？」

◆

「はい、それで構いません。後日俺も、新しく働くことになる人と顔合わせはしようと思うので、直接に関してはナラバさんか、リリアナさんにお願いします」

俺はそう言って、ラックさんに「お願いします」と頭を下げた。

その後、リア、リンに話し合いが終わつたことを伝えて、建物を出た。

俺達は、中断していたデートを再開した。

「ラルク君、今日はありがとね」

「久しぶりにラルク君とお出かけできて楽しかつたよ」

「俺も楽しかつたよ。二人がデートを提案してくれて本当にありがとうね。また次の休みの日に、デートに行こうな」

「うん！」

その日、一日デートをして疲れきつた俺は、すぐに眠りについた。

翌日、俺は鍛錬のため、樂園のダンジョンに戻つてきていた。

昨日のデートのおかげで気力が回復した俺は、序盤から飛ばした。

「ラルク君、昨日のデートが楽しかったのは分かるけど、僕達の分も残してくれないかな……」「リアちゃん達もすごく喜んでたから、楽しかったのは分かつてたけど、私達も鍛えてるんだよ……」

「酷ひどいっすよ。俺達、いる意味ないじゃないっすか！」

張りきりすぎて三人分の魔物まで狩っていた俺に、アスラ、レティシアさん、ルーカスが抗議してきた。

それからは戦いたい欲を抑え、みんなとともに鍛錬を行つたのだった。

その後も迷宮に挑み始めて約二週間が経ち、無事に最深部まで攻略することができた。

この迷宮だけで、全員が30レベル以上上がつた。

レティシアさんは130を超えて、アスラも125を超えた。これで全員が100レベル帯になることができたのだった。

「え、レティシアさんもアスラ君もレベル100超えちゃつたの!? ズルいよっ！」

無事に迷宮を攻略し終えた俺達は、いつもより早い時間に帰宅した。

そして成果を伝えると、リンがそう叫んだ。

「えへへへ、ごめんね。リンちゃん」

「ごめんね。リンちゃん」

「うう……ラルク君！ 体の調子が戻つたら私も迷宮攻略してよねつ！ それでレベルを一気に上げるから！」

「いいよ。今は無理をしないように止めてるけど、子供が生まれてリンも調子が元に戻つたら、いくらでも鍛錬に付き合うよ」

「じゃあ、私もその時は連れてってもらおうかな」

リンの横で聞いていたリアも、参加したいと言つた。

リアが戦闘系の活動に参加したいって珍しいな……
「ああ、いいよ。鍛錬しておいて損はないしな。リアも体の調子が戻つたら二人で迷宮攻略行こうか」

その後、次はどこで鍛錬するかという話になつた。

だが、この二週間休みを数日置きに取つていたが、疲労が溜まつていた。なので、ここで一度体を休ませるために長めの休みを取らないかと提案した。

「そうだね。あまり無理しそうのも悪いし、休むのは僕も賛成だよ」「私もいいよ。無理しすぎて怪我をしたってよく聞くし、ちゃんと休みを取るのに私も賛成だよ」

「了解。それじゃ、明日から五日間じつくりと体を休ませて、次の鍛錬地を探そうか」こうして俺達は、ダンジョンでの鍛錬を終え、五日間の休暇に入ったのだった。



翌日、休暇初日に、俺は一人で楽園の外に出てきた。そして、一号店に入ったという新しい従業員と顔合わせに向かう。

店に着いた俺は店の裏から入り、二階に上がった。

すでにナラバさん達もおり、その場には見知らぬ者達がいた。

「遅れですか」と

「いえ、時間通りですよ。私達が先に集まつていただけですのでお気になさらずに」

俺の謝罪にナラバさんがそう言い、俺は椅子に座つた。

そして、新しい従業員と挨拶することにした。

新規メンバーは三人で、ヒューマン族、エルフ族、ドワーフ族が一人ずつ。ドワーフ族だけ男性だった。

「私は、ルナラと申します。ウエイトレスとして働かせてもらっています」

一人目のヒューマン族の女性が立ち上がり、自己紹介を行つた。

俺は手元の資料を見て、再び彼女へ視線を向いた。資料にはアピールポイントとして“体力に自信がある”と書かれていた。

普通の女性にしか見えないが、よくよく見てみると立ち方が様になつていた。

「以前、働いていた場所も忙しい所だったようですね。“体力に自信がある”と書いてありますか、無理はしないでくださいね。体が大事ですから。体調が悪くなつたら、ナラバさんやリリアナさんに言つて休んでください」

「はい、ありがとうございます」

俺の言葉にルナラさんはそう返事をして、席に着いた。

続いて立ち上がつたのは、エルフ族の女性だ。資料を確認すると、経歴の記載はないが“料理が得意”“スキルレベル4”と書かれていた。

レベル4の『調理』スキル持ちであれば、少し教えれば十分即戦力になるだろう。

ただ、まだ街に慣れてない感じがする。

「私は、エルフ族のキリナです。森の中での生活が長く、外での生活にまだ慣れていませんが、料理の腕はそれなりにあります。料理人としてお店に貢献できるように精一杯頑張らせていただきます」

「慣れない土地での仕事ですので、苦労もあると思います。もし何かありましたら、相談してください」

「はい。自分の成長のためにも頑張らせていただきます」

キリナさんはそう言つて、席に着いた。

最後に残っていたドwarf族の男性が立ち上がり、料理人として働かせてもらつております

スキルもある人だ。

よくこんな人を捕まえてこれたなど少し驚いた。

「僕はディレスと申す。僕もエルフ族の嬢ちゃんと同じく、料理人として働かせてもらつております」

「即戦力として期待しておりますので、ナラバさん達の手助けをお願いします」

この方に関する話題は言つことなかつたな。

新メンバーとの初顔合わせも終わつたので、親睦を深めるため、ちょっとした歓迎パーティーを行つた。

その席で、改めてなんでこの店に来たのかを聞いた。

ルナラさんとディレスさんは、噂を聞いて店にやつってきた、と言つた。

キリナさんは、冒險者ギルドのマスターに仕事を探していると相談したら、ここを紹介されたらしい。

「それって、この王都の冒險者ギルドですか？」

「は、はい。私達、この国の近隣の外のエルフ族は、里の外を冒険したいとなつた時は、必ずこの王都の冒險者ギルドに挨拶に来るのが決まりなんです」

王都の冒險者ギルドのギルドマスターであるフィアさん、副ギルドマスターのララさんは、エルフ族から信頼されている人達で、里の外に出たエルフ族の面倒を見ているらしい。

面倒見のいいララさんは分かるが、フィアさんも信頼されているのには驚いた。

そして、新しい従業員を加えた一号店は、夕暮れ時まで、楽しい声が外まで聞こえていた。

2 迷宮調査

その後、店の方はだいぶ安定していき、ナラバさん達が過労で倒れる心配はなくなつた。
しかし、様子を見ておかないと、自分が知らない間に大変なことになつていたら嫌なので、しばらく樂園から出ることにした。

「どういわけで、必然的に樂園外の迷宮に行くことになつたんだけど、よい迷宮の噂、知つてる？」
「うーん……今の実力にあつた場所は私は知らないかな。樂園でかなり強くなつちゃつて、これまで行つてた迷宮では鍛錬にならないと思うし」

「僕も同じ意見だよ。そういつた情報収集はしてないんだよね」

「そつか。そうなると、ギルドで迷宮の場所を聞くのが手っ取り早いな」

その後、俺達は王都レコンメティスの冒険者ギルドへと向かうこととした。

久しぶりに訪れたギルドは、昔よりも賑わっていた。

「おっ、ラルク達じやないか！ こっちで会うのは久しぶりだな！」

ギルドの中を眺めていると、ドルトスさん達のパーティーがやつてきた。

「そうですね。こっちの世界だと久しぶりですね。ドルトスさん達はこれから依頼ですか？」

「ああ、ギルド長から緊急依頼をもらつてな。これから調査に行くんだよ」

「調査？」

そう聞くと、ドルトスさんは「……ここだけの話だが」と小声で内容を教えてくれた。

その内容とは、レコンメティスの王都から数キロ離れた所に、新しく迷宮が現れたらしい。すでに何組か冒険者が向かっているが、現時点で推定ランクが「B^{プラス}」となつてている。このまま

行けば、迷宮ランクは“A”になるとのことだった。

「……その迷宮、現時点で何層なんですか？」

「今のところは三十層だな。だが、十層ですでにオーガが集団で徘徊^{はいがい}してゐたいだ」

「フィアさんに詳しく話を聞いてみますね。もしかしたら、その調査に俺らも行くかもしけません」

「おお！ それは心強いな。俺達は宿で待つてから、行く時に来てくくれないか」「分かりました。とりあえず、フィアさんの所に行つてきますね」

それから俺達はドルトスさん達と別れて、受付に向かつた。

受付嬢に「ギルド長と話がしたい」と言い、ギルド証を出した。

「あつ、ラルク様ですね。どうぞ、ギルド長室に行つて構いません」

レティシアさんとアスラと一緒に、階段を上つてギルド長室に向かつた。

「ラルク君ッ！ フィギヤツ！」

部屋に入った瞬間、俺目がけてフィアさんが飛んできた。

以前とは違つて魔力が高くなつてゐる俺は、飛んできたフィアさんに、風属性魔法を当てて吹き飛ばした。

吹き飛んだファイアさんの心配をせず、ララさんは感心したように言う。

「お見事です。ラルク君、あの時とは違いますね」

「はい。あの時は、ファイアさんにされるが今まで死にかけましたからね」

「ファイアさんが泣き真似をする。」

「うう、ラルク君、酷いわ……」

「いきなり飛んでくるファイアさんが悪いんですよ。って、こんな茶番してる場合じゃないですね。ドルトスさんから聞きましたよ。新しい迷宮が発見されたんですね?」

「そう尋ねると、ララさんが説明してくれた。」

「一週間ほど前にその迷宮を見つけ、すでに何組も冒険者を送っているが、完全踏破した者は今のところゼロ。」

魔物のランクが高く、下手に下位の冒険者を送ることはできず、近場にいる数少ない上位の冒険者に連絡をして、迷宮に向かわせているのが現状だと説明された。

「なるほど、高ランクの魔物の迷宮ですか」

「ええ、ラルク君達のランクなら問題なく調査の依頼を出せるのですが、受けてもらえますでしょうか?」

「そのつもりでここにきました。レティシアさんもアスラもいいよね?」

「私もいいよ。高ランクの魔物相手に強くなつた私を試せる絶好のチャンスだわ」

「僕もいいよ。ラルク君に教わった魔法の力、どこまで通用するか試したかったから」

二人はそう答えたので、ララさんに依頼を受けと伝えた。

それから俺達は、ララさん達にドルトスさん達と一緒に調査に向かうことを伝えて、ギルドを出たのだった。



ギルドを出たあと、宿でドルトスさんと合流した。

ドルトスさん以外のパーティーメンバーがいなかつたのでどこに行つたのか聞くと、すでに準備のために買い出しに行つたとのこと。

それから、ドルトスさんと迷宮について情報交換を行つた。

ついでに俺が、店のために楽園から出てきたことを伝えた。

「そうだったのか……そうなると、ラルクの店のために早めに調査を終わらせる必要があるな」「すみません、気を遣わせてしまって」

「気にするな。もし数日以内で終わらなかつたら、また俺達だけで行くから、気楽に一緒に調査し

ような

ドルトスさんにそう励まされた俺は、お礼を言つて調査に向けての話し合いを再開した。

話し合い中、お互いのレベルの話となつた。

「そういえば、ラルク達つてレベルはいくつになつたんだ？」

「あつ、やつぱりそこ気になりますか？」

「まあ、気になるというか、一緒に戦う仲間だからな。ステータスを見せるとまでは言わんが、どのくらいの強さなのかは、仲間として把握しておきたい。ちなみにこつちは、俺が少し飛び抜けて150で、他のメンバーも130近辺のレベル帯だ」

「やっぱり、ドルトスさん達はレベル100を超えていたんですね」

さすが、王都でも実力派のパーティーダ。普通の冒険者なら、100の壁を越えられずにいるのに。

「それで、ラルク達はどうなんだ？」

「あ～……先に言つておきますけど、驚かないで聞いてくださいね」

そう言つて俺は、皆のレベルをドルトスさんに教えた。

「マ、マジか？」

「最近、楽園の迷宮に籠もつてレベル上げをしていたんです。出でくる魔物も強い個体が多くて、

効率よくレベル上げができたんです」

「……ま、まあ、あんな世界を作る奴だからな。それだけのレベルがあつてもおかしくないか……」

ドルトスさんはそう言つて、少し落ち込んだ様子だった。

その後、ドルトスさんのパーティーメンバーが宿に戻ってきた。

出発はできるだけ早くと言わわれているので、明日の朝に出ると決まった。

話し合いが終わり、俺達は家に向かっている途中で店に寄つて、「数日間また来れない」とナラバさんに伝えて帰宅した。

「ラルク君、迷宮調査の間なんだけど、後衛は僕とルーカスさん達でやるから、前衛に回つてくれないかな？」

夕食を食べている席で、アスラが真剣な顔をしてそう言つてきた。

「んっ？ 別にいいけど、どうしたんだ？」

「いやさ、ラルク君と一緒に後衛守つてのもの樂しいんだけどさ。自分の力がどれほどなのか分からなくて。ラルク君がいたら確かめにくいかから、迷宮調査の間、試してみたいんだ」なるほどな。俺が一緒にいるせいで、自分の力がどれほどか分からなくなつてるのか。「いいよ。後衛は、アスラとルーカスさん達に任せせるよ」

「ありがとう、ラルク君」

アスラは、嬉しそうに笑つてお礼を言つた。

「そういうわけで、レティシアさん。明日から一緒に前衛よろしく」

「うん、それはいいんだけど……ラルク君、鍛錬の時みたく、全部自分で対処しようとするしないでね。」

今回の迷宮、調査がメインだけど、私も腕試ししたいんだから」

レティシアさんは、強く念を押すように言つてきた。

「大丈夫ですよ。自重しますから、今回は人も多いので支援に回るつもりです」

俺は迷宮調査の間は前衛に回ることとなつた。

明日は早い時間に出発するので、早めに就寝した。

翌日、時間通り朝早く目が覚めた。

リンとリアに見送られながら家を出た俺達は、ドルトスさん達との待ち合わせ場所に向かつた。

「「おはようございます」」

「おう、おはようラルク、レティシア、アスラ」

「今日はよろしくな！」

「ラルク達と一緒に冒険に出れるの、楽しみにしてたよ」

待ち合わせ場所に着くと、すでにドルトスさん達がいて挨拶をした。

合流した俺達は、楽園から連れてきていた魔馬が引く馬車に乗り込み、目的の迷宮へと向かうの

だつた。



馬車に揺られ、目的の迷宮へたどり着いた。

馬車の中であらかじめ陣形の話をしており、俺が前衛に加わることはドルトスさん達に伝えていた。

「……ラルクがいると、楽だな」

「そうだな。ラルク君についていつてるレティシアちゃんもすごいな……」

ドルトスさん達の視線に気がついた俺は、レティシアさんにペースダウンするように言つて、交戦中の魔物を狩つた。

「レティシアさん！ ドルトスさん達が暇してますし、少しペースダウンしましょうか」

「了解。とりあえず、この魔物達を狩つたらで！」

そして狩り終わった俺は、魔物の死体を回収してドルトスさん達の所に戻った。

「すみません。俺とレティシアさんで楽しんじゃって」

「いや、いいんだよ。早めにラルク達の戦力を見極めておきたかったしな。それで分かつたよ……」

俺達以上にラルク達は強いつて。お前ら本当に成長しすぎだ！」

ドルトスさんはそう言って、男泣きをした。

まあ、可愛がつていた後輩に抜かれて、悔しいって気持ちなんだろう。

「いい！ 謝るんじやねえ、余計に虚しくなる！ だがな、俺らだつて負けてらんねえよ！ なあ、す、すみません……」

「お前らツッ！」

「おう！ ラルク達ばかりいい格好させねえぞ！」

「俺らの戦いも見やがれツッ！」

ドルトスさんが仲間を鼓舞すると、声に引きつけられたのか、オーネの集団がやつてきた。

「ラルク達は、そこで見てろよ！ 行くぞ、お前らツッ！」

「おうツッ！」

ドルトスさんは声を上げて、オーネ達へと突っ込んでいった。

さすがAランク冒険者。パーティなだけあって、一つ一つの連携に無駄がない。

俺達は、どちらかと言うと力業で攻める感じだが、ドルトスさん達は、しっかりととした連携技で全員で対処するという戦い方だった。

「やっぱり、ドルトスさん達はすごいよね。私達って互いに任せ合って、連携を特にしないもんね」

「ええ、出てくる魔物が強くなれば、それこそ俺が本気で魔法を撃ちますから、連携を特にしてませんね。リンがないのもありますけど」

「リンちゃん、早く戻ってきてほしいな。四人で行動してたから一人抜けただけで連携できなくなつたもん」

ドルトスさん達の戦いを見た俺達は、連携の大切さを改めて思い知らされたのだった。

その後、俺達も、連携を意識しながら迷宮を進んだ。

連携は完璧とは言えないが、戦力は十分で、苦戦を強いられるることはなく順調に攻略していく。

「難しいって言わせてましたけど、さすがにこのメンツで苦戦はしませんでしたね」

「ああ、そうだな、ラルク達の戦力が大きかつたな。お前らが参加してくれて助かつたよ」

俺達は魔物を倒し、歩を止めず進んでいった。

順調に攻略が進み、苦戦することなく三十層にたどり着いた。

「しかし、ここは久しぶりに見る大きな迷宮だな……最近だと、二十層辺りで終わる迷宮が出現することが多かつたが。この大きさは久しぶりだ」

ドルトスさんがそう言葉をこぼした。

「えつ？俺達がいない間に、迷宮が現れていたんですか？」

「聞いていないのか。最近点々と迷宮が出現してるんだよ。初心者用に残してる迷宮以外は、俺達や他の冒険者で潰し回ってるんだ」

「……」

なんでそんなことが起こってるんだ？確かに、魔力が溜まつたら迷宮ができると教えられたけど、そんな点々と現れるものなのか？

そう疑問に思つたが、特にドルトスさん達がそこを気にしている様子はない。

ダンジョンが複数個所に現れるのは珍しくもないのだろう。

「おつ、いい感じに休憩できそうな場所があるな。ラルク、あそこでいつたん休憩しないか？」

「そうですね。あそこなら魔物が来てもすぐに分かりますし、休憩にしましようか」

休憩できそうな穴をドルトスさんが見つけた。これまで休憩なしで來ていた俺達は、初めて休憩

をした。

休憩後、三十層から下はどうなつてているのか分からぬので、これまで以上に慎重に動きながら攻略を再開した。

迷宮の推定ランクが高いのもあり、出てくる魔物は強敵が多い。

さらにここは景色^{のんき}がコロコロと変わる迷宮で、洞窟だつたり森だつたりと、いろんな所を旅している感覚になつてきていた。

「さすがに五十層ともなると強さが違うな……最初の頃のように、暢^{のんき}気^{のんき}に会話もできないな……」「ですね。隠れて襲つてくる魔物も出てきますし、注意力を削^そがないように進みましよう」

その後も慎重に動きながら迷宮を進んでいく俺達。

一日で攻略するつもりでいたが、さすがに簡単な迷宮ではなかつたようだ。

俺の体力的にまだまだいけたが、レティシアさんやドルトスさん達の体力が厳しい様子だったのでも、今日のところはここまでとして、野営地を選定した。

「……お前らの迷宮での過ごし方、おかしくないか？」

「えつ、そうですか？」

いつも通り、迷宮内的一角に壁を作り、その中にシャワー室やキッチンを作った俺に、ドルトスさんが疑問の声を上げた。

「やっぱり、迷宮内でも普通の生活がしたいなって思いまして、魔法でいろいろと工夫していったんですよ」

「それにしてもだろ……こんな家みたいな所、普通の冒險者は作つたりしないぞ？」

そう言つたドルトスさんだが、俺の作った施設で、しっかりとシャワーを浴び、湯船に浸かつて疲れを取り、夕食も腹いっぱい食べ、装備を外しラフな格好をしている。

それからしばらく、ドルトスさん達と迷宮をどう進むのか話し合つてから、それぞれの部屋に入つて眠つた。



翌日、迷宮内であるがスッキリとした顔で起きてきたドルトスさん達を、朝食を作りながら出迎えた。

「昨日も思つたが、こんな所でラルクの料理が食えるとは思いもしなかつたな……というか、迷宮内でこんなうまい飯が食えるのが不思議でならん」

「分かる。俺もドルトスと同じ気持ちだ」

「私もですね」

ドルトスさん達は次々とそう言いながら、美味しそうに朝食を食べててくれた。

それから、身支度を調えて探索を再開した。

探索開始から少し経ち、俺達は六十階層に到達した。

すると、迷宮の最深部を表す大きな門のような扉が現れた。

「やつとか……しかし、六十階層もある迷宮なんて久しぶりに潜つたな。それも最初から強敵揃いでやつとこの迷宮ともお別れできますね」とは……」

俺達もかなりの迷宮に挑戦してきましたけど、最初から強い迷宮は初めてでしたね。でも、これでやつとこの迷宮ともお別れできますね

俺はそう言って門を開く。そして、迷宮の最深部にあるボス部屋へと入つていった。迷宮のボスは、大きな戦斧を持つ、黒い亜種のミノタウロスだった。

俺達はそれぞれ武器を取り、戦闘に入った。

ここに来るまでの敵は隠れて攻撃してきたりと面倒だったが、ここまでドンと構えられていれば逆に簡単である。

後方支援を受けながら、前衛である俺やドルトスさん達で攻撃を行う。

亞種のミノタウロスということで硬さもあつたが、徐々に傷が増えていき、十分もせずに倒れた。

迷宮のボスであるミノタウロスを倒したことで、閉ざされていた扉が開き、さらに奥へ通じる通路が現れた。

「さつ、早くコアを壊して出ましょか」

「そうだな」

迷宮のコア、それを壊せば迷宮の成長は止まる。

コアがなくなつた迷宮は、魔力を少しずつ取り入れ、魔物を発生させたり、素材を発生させたりするだけの“冒険者の狩場”となるのだ。

「ん~、久しぶりの強敵揃いで楽しかつたな~、よい感じに体も動かせたし、来て本当によかつた！」

「僕も新しい魔法もいっぱい試せたから楽しかつた~」

コアを潰し、アスラの魔法で迷宮の外に出たあと、レティシアさんとアスラがそう感想をこぼした。

それに続いて、ドルトスさんも「ラルク達と探索できて、俺達も楽しかつたよ」と言つてくれた。「こちらこそ、ドルトスさん達と一緒に行かせてもらい、いろいろと学ばせてもらいました。また一緒に行きましょう」

「おう！ いつでも俺達は待つてるぜ！」

その後、俺達は来た時とは違つて、アスラの転移魔法で王都まで帰還した。

3 新作の米料理

王都に帰還した俺達は、そのままギルドに向かつた。

受付でギルドマスターに会えるか聞いて、ギルドマスター室に通された。

そして、どんな迷宮だったかを伝え、攻略は完了したと報告した。

「さすがにラルク君達とドルトスさん達の合同パーティにかかるれば、どんなに難しい迷宮だつて数日でクリアしてきちゃうわね」

フィアさんは肩の荷が下りた感じでそう言い、ララさんに向かつて、迷宮攻略の報酬を俺達に渡すように指示した。

ララさんから報酬を受け取り、ギルド前でドルトスさん達と別れた。
俺達は帰宅することにした。

「「ただいま」「」」

そう言って家に入ると、リビングの方からリアとリンが出てきた。
二人は嬉しそうな顔をして、「おかえり」と言った。

それぞれの部屋に行き、荷物を置いて、部屋着に着替えて戻ってきた俺達は、リビングに集まつた。

「どうだつた、外の迷宮は？」

「まあまあだつたかな？」

「うん、私もそんな感じ。でも、自分達の強さを測るにはちょうどよかつたと思うよ」

「僕もレティシアさんと同じ意見だね。自分の魔法が、普通の冒険者とどれだけ差があるのかも知れてよかつたと思うよ」

俺、レティシアさん、アスラの順にリンの質問に答えた。

シレツとアスラが、『普通の冒険者』と言つたことに、俺はあえて触れなかつた。

「リア達は、何かしてたの？」



「私は特に何もしてないかな？ 本読んだり、編み物したり、あとはお母様とお父様が来てくれて、一緒に食事に行つたくらいだよ」

「えつ、お父様って、王様であるアルスさん達が、直々に来てたのか？」

「うん、私が久しぶりにこつちに来てるつて聞いたみたいで、リンちゃんとも話がしたかったって言つて一緒にご飯食べに行つたの」

「突然、王様が来て驚いたけどね……」

嬉しそうに言うリアと、「気疲れしたよ」という雰囲気で伝えてくるリン。

それから、まだ食べていないと言つた二人と一緒に昼食を食べた。

その後、迷宮の疲れも残つてゐるだろうし、数日は休暇にすることにした。

まあ、俺は店の経営に力を入れるつもりだけど。

「そうだ。せつかくの休みだから、店の方をずっと見るわけでもないし、まだデートに行くか？」

俺がそう聞くと、二人は笑顔で「行く！」と返事をしてくれたのだつた。

翌日、さつそく俺は店の方へ朝から顔を出して、ナラバさんと情報交換を行つた。

「ふむ、人手を増やして正解だつたつてのは見て分かるけど、まだ日に日に客が増えてるつて本当に人気だな……」

「そうですね。ずっと右肩上がりで、ラック様も驚いていましたね。ラルクさんに許可をもらつて出した新店の方も、本店であるここに來るのが難しい方々がたくさん来ていると嬉しそうに言つてました」

「俺も聞きました。失敗しなくてよかつたな、と聞いた時は思いましたが、ここまで人気が続くとは……」

「ラルクさんの考えた料理は、これまでの料理に革命を起こしたと言つても過言じやないんですから！」

俺の言葉にナラバさんは強く返した。そんなナラバさんを見たことがなかつた俺は、一瞬驚いて「は、はい……」と答える。

すぐにナラバさんは落ち着き、話し合いを再開した。

「まあ、ずっと店を見てきた感じで言いますと、今後も人気は上がっていくと思いますよ。最近だと、米を使った新料理を開発してゐる料理人もいると聞いてますし、ますます米料理の人気は上がつていくと想ひます」

「新しい米料理ですか……」

ナラバさんの言葉に俺はそう反応し、少しだけ考えた。

現在出している料理でも満足度はかなりあるけど、もつと他の料理も出してみようかな？

パエリアとか、ドリアとか、米を使う料理はまだあるし、丼物を出せばもっといろんな味を楽しんでもらえるな。

「ナラバさん、これまで品数が少なくて料理も覚えやすいものばかりでしたけど、少し米料理を増やしても構いませんか?」

「ツ！ よいですよ！ 逆に作させてください！」

俺の言葉に、ナラバさんは目をキラキラとさせてそう反応した。



新作の米料理を出すとナラバさんに話した俺は、米料理について、記憶にあるものを紙に書き出していた。

丼物はだいたい食べたことがあるから、見た目を思い出せば、なんとか作れそうな気がする。といつても、例として思ったパエリアとドリアは、作ったことがないうえに食べたこともほとんどない。

たまに、コンビニのドリアを買うことはあっても、どんなふうに作るんだろう？ と意識せずに食べていた。

「うーん……まあ、とりあえず丼物を中心と考えるか。あとは、二号店の改装も必要だな……」

その後、久しぶりにルブラン国の一號店に顔を出した。新メニューの研究の前に、店の状況を把握しておこうと思ったからだ。

本店の一號店に負けないくらいの客の多さで、放置時間が長かったので、心配になっていたのだが……。

そんな俺の心配は杞憂で、二号店を任せていた二コラさんが上手く従業員を使って回していたようだ。

「二コラさん、俺がいない間、本当にありがとうございます」

「いえ。店を任せた以上、全力を以て店を守るのが店長の役目ですから！ まあ、でも実際は、ナラバ師匠に助けてもらつたんですけどね。やっぱり師匠はすごいです。離れた所からの確に指示を出してくるんですから」

二コラさんは、ナラバさんのすごさをそう笑いながら話した。

それから、二コラさんに店の経営状況などを詳しく聞き、働いている環境としてどうなのかも詳しく聞いた。

本店ほどのではないが、やはりこちらも人気店なので人手不足気味らしい。それでも二コラさん含

め従業員全員一丸となつて頑張ってきたようだ。

いやマジで、本店ばかり気にしてたのが申し訳なくなってきた。

「あの、本当にありがとうございます。落ち着いたら皆さんにお礼の品を渡しますね……」

その後、ニコラさん以外の従業員も店に出てきたので、久しぶりに顔を合わせ、少しだけ話し合

いをした。

それから、俺は即戦力となる従業員を増やすために、ベルベット商会で人を紹介してもらうことにした。

「さてと、これで店の状況把握はできたから、次は新メニューの開発だな……」

転移魔法を使える悪魔族のゼラさんを呼び出し、転移魔法でレコンメテイスの自宅に帰宅するの

だった。

帰宅後すぐに俺はキッチンへ向かい、新メニューの開発を始めた。

「あれ、ラルク君、料理してるの？」

「わっ、美味しそうな匂い」

新メニューの開発をしていると、部屋にいたリンとリアが匂いに釣られたのか、キッチンへやつてきた。

新メニューは丼物で、今は牛丼を作り終えたところだった。

「前々から新しい料理を出そうかなって考えてて、新メニューの開発をしてたんだよ。それで、今一品目ができたから食べてみるか？」

「いいの!?」

「うん、味見の時点では美味しかったから普通に食べられると思うけど、他の人の意見も聞きたいしね。ちょうどよかつたよ」

そう言つて俺は、二人に牛丼を盛った皿と箸を渡した。
まあ、肉がご飯の上に乗っているだけだけどね。

二人は普通に一口食べた。

「美味しい！ ご飯とお肉だけかと思ったけど、このかかってるタレが美味しいよ」

「うんうん、タレがかかったお肉もそうだけど、下のご飯にもタレがかかってて、いつものご飯とお肉より美味しく感じる」

二人は牛丼を食べて、そう反応をした。

タレは俺の自作だったので美味しいと思つてもらえるかちょっと心配だったが、ここまで高評価だと嬉しく感じるな。

「美味しいって思つてもらつてよかつたよ。タレは自分好みに作つたから、美味しいって思えるか

立ち読みサンプル はここまで